

キッチンから吹く風

Invitation to Kitchen Earth Sciences

栗田 敬[1]

Kei Kurita[1]

[1] 東大・地震研

[1] ERI, Univ. of Tokyo

数年来合同大会で続けてきました「キッチン地球科学」のセッションは今年は「一般公開セッション」として開かれることになりました。「キッチン地球科学」は出発点においては、2つの意図がありました。一つは地球科学における実験、特に「アナログモデル実験」という手法に未来はあるのか、と言う問い掛け。計算機シミュレーションが一般化した中で果たすべき役割はあるのか？、この点をもう一度考え直してみようと言う意図。もう一つは形式張らない、自由な雰囲気科学を語る場が必要であり、合同大会を「裏番組」として盛り上げようと言う意図を持っておりました。「表番組」として話される、正面から切り込んでいく地球惑星科学のテーマに対して、搦め手からのアプローチや本心を素直に語ることでできる場が必要ではないか、と考えたからです。これには以下のような認識がありました、1：若い人が研究テーマを選択する時に自由さがなく、発想が硬直化しているのではないか、2：何も若い人に限らず研究者全体の頭が硬直化していないか？、3：そもそも研究発表の場である学会にもっと笑顔があって良いのではないか？ このような現状認識に対して、このような認識に対して「キッチン地球科学」が風穴を開けることができたのか、と問われればこの数年来の取り組みはさほど大きな成果を挙げたとは言えません。

一方この間全く別の側面を「キッチン地球科学」が持っていることがセッションに詰めかけていただいた参加者の方々の反応から明らかになりました。それは中学・高校・大学教養課程における教育題材という面です。私は大学教育に関与していますのでその例を述べます。大学1, 2年生の所謂「教養課程」(現在ではこのような名称は急速に消滅しつつあります)や3年の専門課程はじめに行われている実験は多くの問題点を抱えていることが指摘されています。まず学生に人気がない、訴えるところが少なく、何のためにやるのか十分な動機付けができない。そのために「実験の面白さ」を伝えるはずが、逆に「実験とは退屈なものである」という印象を与えているケースが多い現状です。これは実験題材が使い古された、新鮮味に乏しいものであること(丁寧すぎるマニュアルは時として自由な発想を奪い、学生には単に「消化すべき時間」としてしか映りません。)手順が重視される傾向にあり、学生の自主的な参加が阻害されているなどの問題点です。これらを解決する一方法として、簡単な仕掛け・準備で手と頭を同時に働かせる

「キッチン地球科学」の持っている2つの側面を述べてきました。しかし講演会とポスターセッションではこのようなことは忘れて、様々な発想の実験例を楽しんでいただきたいと思います。「今度の週末家でちょっと遊んでみよっか？」とっていただけたら、我々企画者は望外の幸せです。